

奥浄瑠璃「安達物語」

— 語り本文の時代認定 —

阪口 弘之

—

奥浄瑠璃は長い語りの歴史をもつ。よく知られたところであるが、元禄二年（一六八九）五月、松尾芭蕉は『奥の細道』の道すがら、塩釜の宿でこの奥浄瑠璃を耳にして、「辺国の遺風わすれざるものから、殊勝に覚らる」と記した。しかし、この語り物は、浄瑠璃史の上からいえば、単に東北の一隅にとどまらず、上方や江戸など、当時の中央の浄瑠璃史を補完する価値をもっていた。

従前、奥浄瑠璃への関心は、一口でいえば、在地性に向けられてきた。なぜ東北の地にのみ、この特色ある語り物が残されたのか、加えて東国方言、東国訛語への関心も重なり、消え去ろうとするこの東北の語り物に在地ならではの魅力を見出してきた。

しかるに、平成十年（一九九八）刊行の「岩波講座」歌舞伎・

文楽第七巻『浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』では、この奥浄瑠璃を、佐渡や加賀や南九州などに現在も残る古浄瑠璃系人形芝居とは切り離して、これのみを独立させ、一章（「奥浄瑠璃」）を割り当てている。

その理由は、これが人形操りを伴う他の民俗芸能とは異なり、純粋な語り物としてあったからというだけではない。何より奥浄瑠璃が在地系の語り物をも含めて、上方や江戸など、中央との交流の所産として捉えられること、またこの語り物が本来的に優れた物語構造を具有していること、そうしたことよって、前述のように、語り物や浄瑠璃事情増幅への補完資料たり得ていることを重視した結果である。¹⁾

とはいえ、やはり奥浄瑠璃はどこでも奥浄瑠璃である。この語り物がこれまで東北の遺風として、その在地性が高く評価されてきたことを過少にみではなるまい。

確かに奥浄瑠璃全般を見渡すと、その多くは中央から移入された曲目である。しかもその殆どが板本に依拠する。『用捨箱』

が指摘するように、江戸馬喰町の絵草紙屋永寿堂（西村屋与八）から毎春送られてくる「阿弥陀の胸割」きりかね曾我」「熊谷」の類の江戸六段本が奥浄瑠璃の供給源としてあった。蔵書印や所蔵者名から推測するに、東北の地にはこの六段本が多く残され、盛んに書写されてきた様相もうかがえる。この動きには、仙台あたりの書肆なども絡んでいる。むろん、この語り物が盲人の専掌としてあったことは間違いないが、一方で、盲人の語りが記載本文に拠るといえるのは、奥浄瑠璃生成の場に晴眼の人々の関与があったことを明確に示すものであろう。奥浄瑠璃の隆昌が、これに親しんだ晴眼の人々にテキストを読みながら反芻する楽しみをも与えたであろうし、市古夏生氏が紹介されたところによれば、盛岡藩家老北可継などは家老職という要職にありつつ、盲人に江戸新作を読み聞かせ、稽古に励ませたりもしている。

更に江戸の古浄瑠璃太夫の東北入りの事実も最近次々と明らかにされつつある。阿部幹男氏紹介の寛永八年（一六三一）三月の伊達藩記録に拠れば、江戸屋敷での上覧が縁で、歌舞伎の左源太と共に、浄瑠璃太夫の掃部が仙台に呼び寄せられている。³この寛永八年という年次は、中央の操り浄瑠璃史でもきわめて早い時期にあたるが、こうした江戸太夫の来訪は、仙台のみならず、岩手や青森・秋田などにも同様の動向がみとれる。⁴

このように江戸浄瑠璃本の大量の移入、あるいは浄瑠璃太夫の早くからの東北入りなど、奥浄瑠璃隆昌の背景には書承・口

承両面から中央との関係が確実に押さえられる。

つまり、このような関係事象の存在は、前掲岩波講座でも述べたように、奥浄瑠璃が中央の浄瑠璃状況を逆照射する資料としてあることを意味する。奥浄瑠璃に依拠正本が確実に想定できながら、中央ではその作品名すら聞かないものも少なくない。あるいは、中央の伝存正本とは異板の存在が奥浄瑠璃本の分析から浮かびあがる場合もある。その事例も少なくない。

奥浄瑠璃は、このように中央との交流の所産に成る。けれども、奥浄瑠璃の特徴は、中央作品をそのままの形で受け入れたのではない。現存奥浄瑠璃本を広汎に見渡していえば、元の江戸板（時に上方板）の姿そのままを継承している作品も少なくはないが、人形を伴わない語り物という特色をもって、人形操りの場合には先ず考えられないような加除変更がしばしば見受けられる。そうした作品が圧倒的に多い。即ち、在地色を塗り込めた趣向をもつての勝手自在な増幅が広く認められるのである。

抑も東北という地は、物語の発信力には並はずれたものがあり、その創作力が奥浄瑠璃でも存分に発揮され、多くの在地系作品を生みだしてきた。『湯殿山御本地』や『塩釜御本地』『十和田山御本地』というように、その名称からして、東北の地に淵源をもつものも多い。こうした在地の作品を次々生み出してきた創作力が、中央からの作品導入過程では今度は見事な咀嚼力となって発揮され、東北の語りならではの独自色を盛り込ん

できた。こうして中央移入の作品にさまざまな在地伝承が塗り込まれ、装いさえ変わって東北に根付いたものも珍しくない。このように、奥浄瑠璃はいささか曖昧模糊たる相貌をもち、内容・本文共に融通無碍な改変さえ許容する流動性を特徴とした。更に加えて、奥浄瑠璃の語り手達は、中央の「浄瑠璃」というジャンル概念からは大きくはみ出るものまでも自家葉籠中のものとしてきた。『筆満可勢』は、奥浄瑠璃の特徴の一つに、「盛衰記、曾我杯、軍談書に有るもの、何にても皆語る」という点を挙げるが、実際、縁起や軍記に限らず、川普請の記録文書のようなものまでもが浄瑠璃調で語られている。『清川大堰開発』などの類である。およそ対象をえらばず、もう何にでもかぶりつけて浄瑠璃調に染め抜いてしまおうという印象である。こうした浄瑠璃ならぬ浄瑠璃に出くわすと、率直なところ、何がなにやらという思いにさえ至る。けれどもこれもそれもが、奥浄瑠璃はどこまでも「当地東北」の語り物という強い意識のもとに語り継がれ、広められてきたことを示しているのであろう。その結果、中央移入の作品にも土着の泥土臭さが匂うし、一方ボサマヤジョウリさん（奥浄瑠璃の語り手）の達者な語り口調に乗せられて、在地の物語も中央の洗練された慣用表現で彩られ、中央作品との区別も難しいということになる。浄瑠璃と他ジャンルとの境界線が引きにくいように、中央と在地的なものが一体的に混融し、その区別がつきにくいのである。特に在地系といわれる作品にそれがいえる。それだけに、奥浄瑠璃にあつては、

在地と中央との関係解明が、個々の作品の成立経緯をあきらめる上からも重要な課題となってくる。奥浄瑠璃に備わる在地性という特徴が、中央とどのように絡んでいるのか、あるいは絡まないのかということが最も解明を待たれるのである。つまり、その生成伝承などから見て、東北の地に胚胎したと想定される物語で、かつ奥浄瑠璃として語られるものにあつては、それはじめて浄瑠璃というジャンルの特質を獲得したのは中央でのことであつたのか、それとも東北の地なのかという点が問題になるのである。東北の伝承が中央にもたらされ、そこで浄瑠璃化され、再び東北へ逆移入された作品か、それとも一見そのようにみえながら、その実、中央に渡ったことはなく、東北の地で浄瑠璃常套の口吻（表現）を綴り合わせて成った文字通り東北産の曲目か、その見極めが肝要なのである。

やや理屈っぽくなつた。少し具体例を挙げて述べてみよう。

たとえば武勇復讐譚として知られる『もろかど』は、岩波講座でも少し触れたところであるが、奥州栗駒の初ヶ崎阿弥陀堂信仰を説き立てた奥浄瑠璃に早くから関心が寄せられてきた。⁽⁵⁾『迫合戦（奥州三迫合戦記）』『稲瀬ヶ城森館軍記』などと、曲目名にちらばりが見えるのは、奥浄瑠璃諸本が信仰宣布を意図する物語の結末部分で大きな異同を見せることに起因している。福田晃氏も触れられるように、奥浄瑠璃では、師門の身替りに果てた月輪兄弟や菊王丸を弔うべく建立したそれぞれの寺院縁起譚としてこの物語を結ぶため、在地的な「異伝」部分が

膨らみ、たとえば説経の『をぐり』同様の異本⁶が生じたと推測される。しかし、この在地性豊かな奥浄瑠璃も、寛永六年頃で押さえられる中央の草子系本文の成立時を遡るものではないとされる。加えて、浄瑠璃本の伝存は聞かないが、『大野治右衛門定寛日記』によって、寛永十八年六月に東海道筋の吉田(豊橋)での浄瑠璃上演も確認できる。すると、東北の在地性濃いこの奥浄瑠璃も、早く中央で浄瑠璃化されたものが、後年に東北の地に再び持ち込まれ、上述の如き諸寺の縁起譚として再生をみたのかもしれない。しかしながら、一歩退いて考えるならば、寛永十八年の浄瑠璃上演は、中央にあっても相当に早い記録である。仮に東北伝承が中央に入って浄瑠璃化を遂げたとしても、その時期からみて、東北では近世初頭を遡る、場合によっては中世にまでくい込むこの伝承の拡がりがあったはずである。その頃の東北での様相が気になるのである。それは奥浄瑠璃がいつに始まるかという問題とも関わる。『奥羽永慶軍記』によれば、早く天正年間に「白川ニ座頭有テ尼公物語ノ浄瑠璃ヲ語」つたという。こうした記述に沿えば、当該伝承もあるいは現存浄瑠璃本内容に繋がる語り物のようなものとして——場合によって、浄瑠璃そのものとして——中央に運び込まれる以前から既に東北の地で行われていた可能性も想定されなくはない。斯くの如く、東北に伝承基盤をもち、かつ中央の浄瑠璃とも何ら遜色のない奥浄瑠璃にあつては、その成立をいつどこに求めるか、なかなか一筋縄ではいかぬ困難な問題が随伴するのである。

やや前置きが長くなったが、奥浄瑠璃の場合、完成度の高い作品であればあるほど、その成立事情の把握に困難が伴うことを述べた。常套趣向や慣用表現で巧みに装われた場合、作品内容の新旧の見究め、言い換えれば作品成立年代の抽出が難しく、中央の浄瑠璃史への関係づけに課題を残すのである。そうした作品の一つとして『安達物語』を紹介し、以下、検討を試みたい。『安達物語』は、都から下つてその地を統治していた武士が、新しく中央から赴任してきた国司の權威づくの横恋慕で妻との仲をさかれ、一家一門が艱難辛苦を重ねるが、神仏の冥助によって再び栄華をとりもどすという物語である。

これまで紹介されたことがなく、架蔵本を知るのみである。奥浄瑠璃本には比較的珍しい大本(二七・七糎×一九・〇糎)で、表紙は藍色無地。題簽は剥落してなく、内題に「安達物語」、その下部に「初段」とある。段数は八段。袋綴で八行六十九丁本。中央折目(柱心)上部に丁数を記す。丁寧な書写本ながら、癖字で判読に苦しむ所がある。最終丁表本文末に「安達物語りの畢」、同裏に「安政五戊午歲晚春」「安田宮作書求之」とある。詳しい梗概は別欄に記した通りであるが、『神道集』の「上野国兎持山之事」をはじめ、『もろかど』『明石』『堀江』『月かげ』『はもちの中將』などと多くの点で類同性をもつ。その限りでは、

中央の語り物との交流が想定できるが、『姓氏家系大辞典』に拠ると、「安達絹」（原本未見）所引の「安達太郎明神箕輪権現鬼面骨明神縁起」に、次のようにあるという。

二本松塩沢村田地岡の城主を安達太郎殿と申し候。此の太郎殿は都より御下り、安達郡の郡主に御成り、今の田地岡に屋敷を建て、御座候。飯坂の城主佐藤殿の娘を御妻にして、子もこれ有り候処、時の国司、美人のよし聞き及び、佐藤殿に仰せ、安達の御前、御子ともに、飯坂の城へむかへさせ、奪ひ取る。御前悲みて自害せられ、御子四歳にて、乳母並に箕輪太夫鬼丸に抱かれ、安達山へ隠れ候。其の後、佐藤殿と安達殿と合戦し、安達殿漸く命計にて御退き、都へ上られ候

『安達物語』は、どうやらこの縁起から出ているらしい。冒頭にも、

爰に奥州道のくの八ヶ所明神並安達太郎明神の由来を委舖尋るに

とあり、終部も、これに呼応して、登場人物がそれぞれ塩釜十四社と安達太郎山大明神に祀られたと結ぶ。

大臣の夫婦の礼身を移し給い 安達夫婦に権太吉信二人乳母源太諸供八人の人々わ 塩釜明神の浦八ヶ所大明神と顕れ給いて 国家を御守り給ふ也 夫迄塩釜六社明神成けれ供 是よりしては塩釜十四社立給ふとは 此人々の御事也 若君玉王丸八十五歳にて御けんふく被成宛 安達太郎殿とぞ申ける 二度田地か岡へ移せ給い 棟を並て家形を作り棟数を並

べ 栄花栄へ 百余を大応しやうを遂げ給い 安達太郎山大明神と顕給い 扱討死の桑原杉田進上進難大田山口初めとして五十余人 安達太郎に五十四ヶ所の大明神と顕れ給ふと聞へける 彼の人々の御伊勢生期も今も未代も例し少しく無き次第とて皆感せぬもの社なかりけり

『安達物語』と「安達太郎明神箕輪権現鬼面骨明神縁起」とは、このように密接な関係をもつ。しかし、両者に違いもある。「縁起」では、御台が御子四歳の時に自害しているのに対して、淨瑠璃では、梗概にも記したように、姫君は国司の館、高の鶏城たかに無理やり送り込まれる。しかし、何としても安達の元へ戻りたい姫は、国司を謀り、松島大明神に百日参籠を願い出て許される。そして、厳しい警護の目を盗んで松島を脱出して、安達がいるという噂を頼りに田地が岡に辿り着く。一方、安達は国司や舅に騙されたと気付くや、高の鶏に押し寄せるが、主従三騎に打ち負かされる。しかし、身代わりになった家臣等に助けられ、信濃の諏訪の兵衛のもとに身を寄せる。姫は田地が岡に着いたものの、そこに安達の姿はなく、自害を思うが、神助によって、諏訪でようやく二人は対面を果たす。こうして諏訪の兵衛の活躍などもあつて、国司の横暴が帝の前であかさされ、安達はふたたび高の鶏を攻め、国司を滅ぼし、めでたく出羽奥州両国の新しい国司に任ぜられる。

荒っぽい説明になったが、右内容からも明らかなように東北在地の豪族間のせめぎ合いを、美しい妻女争いを軸に展開し、

それらを安達や塩釜周辺の神仏縁起として説いた作品である。福島地方では、安達太良山の「安達太郎伝説」として昔話にも残っているようであるが、浄瑠璃では、要するに、都から東北の地に下った若き武将が美しい妻を娶り、若君にも恵まれ幸せの中、新しく赴任してきた国司に妻を強奪される。しかし夫婦の絆は強く、家臣達の命をかけた活躍でついに国司を討ち果たし、再び領主に返り咲き、往生後はそれぞれが神として齋われたという本地譚として語られる。

この物語構想が、『もろかど』『堀江』あるいは『村松』といった作品と酷似することは先に述べたが、趣向レベルでも、その他、『をぐり』『鎌田』『愛護の若』『さんせう太夫』などといった著名な説経や浄瑠璃との関連が迎れる。その語り口調を紹介する上からも、一、二事例をあげてみよう。

初段で二条三郎（後の安達）は、嫁選びの折、姫達に次々難癖をつけて帝の怒りに触れ、奥州に流される。「御息女達を御覧して色々御難をと聞ひける 髪の長ひは是は蛇身の変化連 仏の禁_メ給ふ也 色の白きわ雪女房也 せいの高いは巳女也」と、小栗の妻嫌いさながらの横柄さである。しかし、二段目に入り、舞台が東国に移ると、これまた小栗同様一転して、佐藤頼信の末娘照日に見ぬ恋をし、家臣桑原を商人に仕立て、姫に恋文を届けさせる。戌亥の館の姫の返事の素晴らしさ。このように冒頭部分は『をぐり』と全く同様の展開をとる。

四段目、頼信の裏切りにあい、酒宴の席で討たれそうになっ

ての安達の述懐、それを知らなかった妻の歎き、こちらも『鎌田』をただちに連想させる展開である。

替り安きは人心 病気類と聞柄は はるく下し心指 唯徒に引替て やみ討に内匠給いし事 頼信の心の内社怪しけれ
由夫逆も是悲なし よそに恨み有ね供 只うらめ敷は照日舞
此年月を名染にて 玉王丸か情けにも 親の起る悪逆を姫か知らぬと言事なし 夢程智らせて有成は 夜中露と成迎も跡に恨み残スマシ 実には数多の子は持供 女の子には心免スナト 禁の有を知らぬは凡夫の迷ひ也 由無事に心寄せ 思ひの種をも留かと 是附てふ便やな 玉王丸は何と成 悪気身の果と一人済ておわします 是は扱置 姫君は遙の奥におわセシカ 安達殿もみたちへ御入候と聞召て 此方はこの事しろし召すして やみく_くと討れ給ふ物成は 最期に自らを御恨み給ふへし 恥しや 何とかして此事少シ知らせ申さんやと思召 兎やせん角とあらましと案事煩ひ給い供……
やや長い引用になったが、右のような著名趣向が比較的洗練された慣用表現を用いて随所に配置され展開をみるのが、この奥浄瑠璃の特色である。そうした点からいえば、中央の前掲諸作にも匹敵するきわめて優れた作品とさえ評価されよう。むしろこうした浄瑠璃が今まで知られることなく、どうして埋もれたままであったのか、不思議に思える程である。それほどに表現構想ともに揃った奥浄瑠璃の中でも傑出した作品の一つであろう。

扱、このようにみえてくると、問題はこの語り物の成立経緯である。物語内容からみて成立基盤が福島、宮城、さらに信濃あたりを含めるとしても東国にあることは間違いない。ただ、前章で見たような中央諸作との類同性は気になる。東国種とはいえ、中央にまで伝搬をみていた可能性も否定できないからである。勿論、段構成が江戸系に一般的な六段ではなく、梗概に記したように、八段のしかも相当な長篇であることからいうと、仮に中央を経由していても、その直移入ということは考えにくく、東国でのかなり古い時代での成立が一応は想定されよう。しかし、テキストは「安政五年（一八五八）三月」の年記があり、幕末に近い写本である。むしろ、前掲引用文の範囲でもすぐに気付くように、用字などからみても転写本であることは間違いない。親本の成立時期が問題となる。つまり、その成立時期がいつ頃まで遡るかということである。

一般に奥浄瑠璃本は、その殆どが寛政（一七八九〜一八〇〇）以降の書写になる。江戸後期以降で、明治期のテキストも多数伝存する。けれども、江戸中期、ましてや江戸初期に遡るテキストは殆どなく、皆無に近いといつてよい。したがって、このテキスト書写時代が奥浄瑠璃の最も盛んな時期であったとみてよいはずである。ところが不思議なことながら、奥浄瑠璃が盛

んに行われ、奥浄瑠璃本が次から次と生み出されたこの時代に、江戸や上方で初演をみた演目が奥浄瑠璃本には見当たらないのである。上方では近松、江戸では土佐少掾や虎屋水閑、薩摩外記あたりの作品が下限となる。上方正本を讀物化した江戸六段本の存在を考慮に入れても、せいぜい享保期後半までのもので、それ以降の演目は見当たらない。即ち、奥浄瑠璃最盛期の初演演目が見当たらないのである。尤も、最近、大阪市立大学奥浄瑠璃研究会で渡辺尚子氏が、『十和田山本地』に『日蓮聖人御法海』のいくだりが取り込まれている事実を指摘された。いずれなんらかの形で詳しい発表があるかと思うが、こういう事例は一、二にとどまる。つまり、奥浄瑠璃は、その最盛期、既に新作を語るものではなく、専ら古い伝承曲を語るという状況にあった。ということは、『安達物語』の「安政五年（一八五八）三月」という奥書年記は成立年代考証にはあまり役に立たないということになる。むしろ、奥書年記は無視して、奥浄瑠璃が中央から盛んに作品移入を見た時代、したがって前述のように、享保後期あたりをとりあえずの下限としてその成立時期考証を進めるのがよいのかもしれない。

では、その先、どこまで遡れるのかということであるが、これも中央との対応が認められる奥浄瑠璃一般の様相を手がかりにして考えるに、今度はそれ程に遡れないのである。そんなに古い時代の演目が見当たらない。前述した『もろかど』のような事例をどう考えるかという問題などもあり、断定的にはいえ

ないが、奥浄瑠璃の演目は金平物あたりが早いところである。奥浄瑠璃として早くから知られてきた『丸山合戦』（斎藤報恩会蔵）は、承応期（一六五二〜五五）の『にしきど合戦』に依拠しているが、これなどが金平物でも早い事例となる。したがって、中央移入の奥浄瑠璃の大半は、その承応あたりから享保あたりにかけて、上方や江戸で初演をみた演目ということになる。奥浄瑠璃は、この承応から享保という比較的短い期間にレパトリーを一举に拡大したように思われる。ところがその後は、なぜか新作の移入はびたりと止まり、専ら享保期までの演目の伝承に終始するのである。

したがって、『安達物語』もそのような奥浄瑠璃史に重ね合わせて推測すれば、成立時期は奥浄瑠璃がレパトリーの拡大に努めた承応頃から享保頃までのあたりでまずは押さえるべきかもしれない。

しかし、この作を読んでの私自身の印象を率直に述べれば、あるいはもう少し古いのではないかという気がしないでもない。憶測はもとより控えるべきであるが、『安達物語』が既に述べた通り、『もろかど』や『堀江』『村松』などと物語構想を一にすること、更に『をぐり』『鎌田』『愛護の若』『さんせう太夫』などとの類似趣向も随所に見出せ、しかもそれらが中央常套の語り口調で述べ立てられていることなどが、その印象を支える。仮にこうした作品群との直接の交流がみられたとすれば、当然、成立年代も右諸作と同じ頃まで引き上げて考えてみる必要も

ある。

そんなこともあり、前述の岩波講座では、この『安達物語』の奥書年記と古態模様の作柄との年代的隔たりを念頭に、この作が相当古い語り物とみえるのは、中央からの浄瑠璃作品にも十分に精通した奥浄瑠璃の語り手達——ボサマやジョウルリさんと呼ばれた人が、浄瑠璃の常套的な趣向や慣用的な口物を巧みに繋ぎあわせ、いわば綴織（編集）的手法で、この物語を語り上げたからではなからうかという一応の見通しを示した。成立はそんなにも古くはないが、古い浄瑠璃や説経表現に精通した語り手達によって、古い語り物的装いが施されたのではないかという憶測である。とはいえ、その見方に十分に確信があったことではなかった。しかしともかくも、古い語り物という印象を受けるのは、どうも古態に装われた結果で、浄瑠璃として形を整えたのは、中央からの新作演目の移入が続いた時代、場所も東北の地でのことではなかったのかというのが、ひとまず辿り着いた結論であった。東北の語り手達はそれほど古い語り口調を自家薬籠中にしていたという印象を持ってきたからである。そして、これを私は「古装された物語」——古さに装われた物語——と呼んできた。

しかし、そういう見通しを示しながらも、その頃から気になる一本があった。岩手県立図書館蔵の『九戸軍記』で、これには「明暦二年（一六五六）」の序がある。これは年次の判明する奥浄瑠璃本の中では最古の部類に属す。ただこの物語は、天

正十九年（一五九二）の九戸政実まことねの謀叛を扱ったもので、本来軍書としてあったものを奥浄瑠璃が取り込んだものである。例の「盛衰記、曾我杯、軍談書に有るもの、何にても皆語る」の類である。それ故、浄瑠璃としてのこなれた語り口調は余りみられず、これまで浄瑠璃研究の立場からはさほど関心は寄せられなかったが、奥浄瑠璃が在地の合戦譚をこのような形で早くから語ってきたことは注意すべきである。しかもその軍書が浄瑠璃に取り込まれるには、この戦いそのものに直接間接に繋がりをもつ晴眼の知識人の参画があったことも確実である。なんと言っても、まだ数十年立つや立たずの戦さ物語なのである。

そういうことに気付くと、実は『安達物語』も実際の合戦を素材として潤色された浄瑠璃という可能性が浮かび上がってくるのである。繰り返して述べてきたように、この浄瑠璃には巷間流布の語り物との類同性が指摘できる。その限りでは、他の語り物同様に特定の史実に依拠しているとは考えにくいところである。街道筋に語り手達が袖擦れ合い、あるいは語りの場を共にすることで、語り物同士の交流がみられ、そうしたことでいくつもの類同作品が生まれた。『安達物語』も、東北の地から中央にまで伝搬をみていたならば、そうした語り物同士の交流のなかで、そこに在地の伝承が適宜盛り込まれて誕生したと、まずは考えてよいところであろう。

しかし、この物語から地名や人名を注意深く拾いあげていくと、この作品の根本に、あの観応の擾乱（一三五〇～五二）の足

（利幕府の内訌）が東北の地にも及んで、吉良氏と奥州畠山氏が対立した戦いが踏まえられているように思える。この戦さでは、畠山高国・国氏父子が討たれ、家臣に匿われた国氏の遺児王石丸（大石丸・平石丸）が後に国詮を名乗り、塩沢の田地ヶ城に拠った。安達太郎は浄瑠璃では幼名を玉王丸と呼ばれているが、この王石丸後の国詮が安達太郎に擬せられているのではないかと想像する。事実、寛文から元禄頃の「円東寺文書」や「相応寺文書（安達太良山縁起）」では田地ヶ岡城主を安達太郎と記す。尤もこれを否定する地誌類も多いが、少なくとも寛文以前に浄瑠璃同様の伝承がこの地で行われていたことは間違いないまい。

このように、『安達物語』には観応の擾乱に端を発した東北の内乱が踏まえられていると推測するのであるが、以下、そのように考える理由を今少しつけ加えたいと思う。

まず、「多賀の国府」が「高の鳩」とよばれているが、この呼び名が通行したのは、南北朝期のことといわれ、観応の擾乱と時代を同じくする。また、「求目城」の「求目」は、今の「本宮」であるが、この「求目城」の主を鹿子かのことするのは、国詮の次男満詮に始まる鹿子田氏が意識されていることも想像に難くない。「鹿子田」でなく「鹿子」であるのは、テキストの転写段階で「田」が落ちたのか、それとも当初から、わざとそれと匂わせて実名を避けたのか、そのあたりは不明であるが、国詮は至徳元年（一三八四）、領内の神社に対して、神領として村々

を安堵する旨の判物を発給している。この物語が塩釜十四社と安達太郎大明神の本地譚として首尾一貫しているのも、語り物の特色といえはそれまでであるが、右の事実の反映が多少なりともあるのである。即ち、前述したように、安達夫婦・吉信・二人の乳母・源太ら八人の人々が、塩釜の浦八ヶ所大明神に祀られ、玉王丸も十五歳で元服して安達太郎と名乗り、死後、安達太郎大明神と顕れたという点との関連である。

その他、浄瑠璃では姫の父佐藤頼信が飯坂の城主とあるが、ここは佐藤基治の居城として知られてきた。この基治の子供に「佐藤継信・忠信」兄弟が知られ、『安達物語』と『尼公物語』との繋がりも視野に入ってくるのであるが、その点はともかくも、今、挙げた諸事実を総合的に考えると、この物語が東北の地をそれこそ血で染めた実際の合戦譚に発していることが見えてくる。おそらく奥州畠山氏に繋がる人々の関与があり、その周縁で醸成された戦い物語が奥浄瑠璃として装いを整えたと想像されよう。先に触れた福島「安達太郎伝説」では、安達一族が後に姓を畠山と称したとするのも、符合するところがあ。それは、秋田入部後の佐竹氏が自家の支配の正当性を主張すべく『金沢安部軍記（安倍合戦の次第）』の再成に関わったこと、また、寛永七年（一六三〇）、天宥が羽黒別当に就任以来、これに反発した湯殿山真言系寺院の周辺で『湯殿山御本地』が語り出されたことなども、背景を同じくするように思える。しかもこうした指摘がさほどはずれてもいないとするならば、

『安達物語』が浄瑠璃として相当早くから語られていてもおかしくないという、今度は先に述べた見通しとは大きく違う可能性も浮かび上がってくるのである。

奥浄瑠璃は、その始まりは明らかでないが、『奥羽水慶軍記』は天正年間のこととして、「白川二座頭有テ尼公物語ノ浄瑠璃ヲ語」ったという。前述の通りである。勿論、この『奥羽水慶軍記』は、旧記や古老の見聞で纏められていて、記述内容を鵜呑みには出来ないかもしれない。けれども周知のように、語り物としての浄瑠璃は十五世紀半ばでその発生を確認できる。康正元年（一四五五）の「瑠璃光山安西寺略記」や、文明七年（一四七五）七月の『実隆公記』紙背文書の記述がそれを証する。右の『金沢安部軍記（安倍合戦の次第）』も、慶長六年（一六〇一）以前に行われていたことが、阿部幹男氏によって紹介されている。であれば、浄瑠璃の東北への伝播時期を、『奥羽水慶軍記』記事を参考にしてもさして問題はないであろう。そして、その流れで考えると、『安達物語』の成立も、場合によっては、近世初頭、あるいは中世末期頃まで遡る可能性も生まれてくるのである。

このように、『安達物語』については、その成立が浄瑠璃としてはかなり早いのか、それとも「古装された物語」と呼んだ見方がそれなりに正鵠を射ていて、それ程に遡れないのか、なお判断としない。

しかし、この浄瑠璃が「観応の擾乱」にはじまる東北の内

乱を踏まえていることは確実で、しかも、他の中世来の語り物とも交流の跡が辿れて、すぐれた物語構想を具有しているとの評価を下すに躊躇はない。奥浄瑠璃としては際だった語り物である。

四

扱、遅疑逡巡した言い回しで終始してきたが、本稿で述べたところを纏めれば、ほぼ以下のごとくである。

奥浄瑠璃の特徴は、古い演目が後代まで保持され、奥浄瑠璃が大いに流行をみた最盛期にも中央の新作を取り込んだ形跡はない。専ら古い時代の作品を語り広めてきた。したがって、『安達物語』の現存本には「安政五年三月」の年記が見られるものの、転写本でもあり、相当に古い時代の成立も考えられる。場合によつては、近世初頭から、更に中世末期に遡るという推測すら成り立つかもしれない。

しかるに、奥浄瑠璃の場合、厄介なことは、在地伝承ともいふべき縁起部分で、加除変更が目立つ点である。伝襲された慣用的な語り口調で、この縁起譚、由来譚が多彩に装われ、自在な増幅をしばしば見せる。それ故、在地伝承と関わりを見せる奥浄瑠璃にあつては、趣向や語り口調から、成立年次を特定することが難しい。語り口調に時代的特徴を見出せても、それがそのまま成立年代を意味するとは限らないからである。見台に

乗せた床本の本文通りに語る江戸や上方の太夫とは違い、奥浄瑠璃の語り手は、ある意味では、脳裏に浮かぶまま自在に本文を増幅するところがあつた。いわゆる流派確立まではそのようにいえる。しかもその際、古くからの語りには練達したこの達者な語り手達は、新しい表現法には殆ど関心を寄せなかつた。専ら伝統的な表現法で加除変更を施し、しかもその周辺には、自分たちが承知する在地伝承を盛り込むことに熱心な晴眼の人々がいた。加えて奥浄瑠璃本は写本で伝わる。仙台の貸本屋などの専門業者や、達筆の書き手達も熱心に六段本を写しているが、いわゆる漢字覚えの手習いテキストとしても随分多くの写本が生み出されている。そうした中には錯誤本文が更に錯誤本文を増幅させ、諸本分類に困惑を覚えるものも少なくない。奥浄瑠璃本はその点で最も安定性を欠くテキストである。奥浄瑠璃は、その意味では、本稿で殆ど触れるところがなかつたが、語りという口承問題に加え、この書承問題も絡み、成立論議にはいよいよ難しさが付きまとうのである。

しかし、とはいへ、第一義的には、やはりその語り口調の時代性をまずは位置づける必要がある。最後にそうした観点から『安達物語』の特徴ある表現例を二、三挙げてみたいと思ふ。

- ① 打子盃散々に蹴立 相野障子を蹴離して 供をも連す只忝
騎 信夫を指て帰りて

彼吉信か振舞 適孝成侍やと誉ぬ者社成蒞りけり(三段末
十九才)

②吉信をは自ら随分すかすべし 御心安かれと薄衣ぬ取て
懸 吉信館へと

家形に成ば 母上は先吉信に打向 (二十オ)

③母上はなのめならず思召 然はいを留めべし迎 しすま
したりと思し召 悦ひ屋形へ帰らるゝ、

屋形になれば 頼信へ由を斯と宣は 頼信悦儀限りなし
(二十一オ)

ここに挙げた本文例は特殊なもので、『安達物語』に一般的な
ものではない。けれども脱文、脱字でこのような本文になった
のではない。本来的な本文とみてよいものである。というの
も、実はその特徴が寛永期にみられる「キリ」の語り口調に通
じるからである。「キリ」は、浄瑠璃正本としては最も古い寛永・
正保期のものにしかみられない節章で、間もなく周知の「三重」
にとつてかわられ、今日にまで至る。そういう意味で、「キリ」
は時代特定が最もしやすい節章といえる。

次の事例は、寛永二十年(一六四三)正月の天下一若狭守藤
原吉次、即ち山城左内正本『いけとり夜うち』のものであるが、
「キリ」に関わる本文特徴が見てとれる。

a はや本國キリさしてそキリ國にもなれば

b とも人あまた引くしてやまとの国キリへとやまとの国に聞え
たる吉野の郡にましますか、物のふを召れ、つる王丸をめ
せと有、承つてキリともさたは、つる王殿にちか付

c うへのかわらへキリ上のかわらに付けければ

この『安達物語』と『いけとり夜うち』の二群を対比すると、『安
達物語』の①例の「歸りて」は『いけとり夜うち』b「承つて」
と同じ語り方である。「キリ」を伴うことで、「て」の接続性を
幾分残して、終止感を滲ませた語り方である。②③の表現法は、
「どこどこへ」と語ったあと、もう一度、その場所名を発語的
に繰り返して場面描写に入るもので、a b c 全てに同様の表現
法が見える。そして、その何れもが「キリ」に関わっている。
それ故、①②③は錯誤本文ではなく、「キリ」の語り口調をよ
く反映したものと推断される。むしろ「キリ」は場面転換や人
形の登退場など、操り演出にも関わる節章であるが、『安達物語』
が中央の操り舞台にかかったとは思われない。しかし、ここに
「キリ」の語り口が想定できることで、この作品が寛永・正保
頃の成立という可能性が濃くなることは確かである。その他、
「去程に 安達殿も鰐の口とくしやの口を通れ宛 家形に帰ら
れ給い宛 是は扱置信夫の里へ残りたる七十五人々々」(三十
オ)なども古い語り口を想起させるもので、こうした用法も散
見される。しかし、繰り返し述べたように、奥浄瑠璃の語り手
達は実に達者な語りを誇った。古い語り口調を後代までよく保
持した。その伝襲的な語り口調で、東北在地の古い軍記を彩な
したともいえないわけではないのである。『安達物語』が例示
したような語り口調で全編終始しているのであれば、それは寛
永・正保あたりまでの語り物とほぼ言い切つてよいかとも思う
が、全体の語り口調は必ずしもそうではない。それ故、そのあ

たりの見極めがなかなか難しく、私自身、なお迷いの中にあるというのが正直なところである。奥浄瑠璃の成立年代考証はこの芸能が減んだ今となつては、当然、奥浄瑠璃本に拠らねばならない。しかし、テキストの書写年代から作品の成立年代の特定は難しく、しかも語り口調も時代性を反映するかにみえて、実のところ、その抽出は困難を伴う。この書承口承の絡みをどう考えるのがよいのか、奥浄瑠璃研究に立ちはだかる大きな課題である。

〔注〕

(1) 阪口弘之編『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』一九九四 和泉書院は、そうした観点から、奥浄瑠璃二十六点に解題を添えて、翻刻紹介する。

(2) 市古夏生氏「北可継日記」『近世初期文学と出版文化』一九九八 若草書房

(3) 阿部幹男氏「南部・伊達両藩の古浄瑠璃―古浄瑠璃―熊谷先陣問答」定着の軌跡―『岩手県立一関第一高等学校研究紀要』第八号 一九九九

(4) 前掲阿部幹男氏に諸論考が備わるのをはじめ、武井協三・和田修・鈴木博子・加納克己氏や阪口弘之に言及がある。

(5) 代表的論考に以下のようなものがある。
・福田晃氏「もろかど物語とその伝承」『軍記と語り物』

第二号 一九六四

・室本弥太郎氏『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』一九七〇 風間書房

・松本孝三氏「奥浄瑠璃「迫合戦記」の諸本―分類と詞章の検討を通して―」『立命館文学』第五〇五号

一九八八

(6) 「をぐり」の場合、美濃墨俣の正八幡・結ぶの神(絵巻)、都北野の愛染明王・結ぶの神(奈良絵本)、常陸鳥羽田の正八幡・結ぶの神(佐渡七太夫豊孝正本)など、本地部分で、語りの場を示すように、諸本間に異同がみられる。

(7) 阪口弘之「街道の浄瑠璃―左内と宮内―」『人文研究』第二十九卷第一分冊 一九九七

(8) 志立正知氏『歴史』を作った秋田藩』二〇〇九 笠間書院

(9) 横山重・室本弥太郎・阪口弘之『古浄瑠璃正本集』第九一九八一 角川書店、及び注(1) 前掲書。

(さかぐち・ひろゆき)神戸女子大学古典芸能研究センター

『安達物語』梗概

初段

▼ここに語るところは、奥州陸奥の八ヶ所明神並びに安達太郎明神の由来を尋ねた物語である。

▼冷泉院の御代、二条右大臣清光に類い稀な御子、二条三郎があり、桑原左近重成らに傳かれていた。三郎は嫁選びの折、姫達に難癖をつけて帝の怒りに触れ、奥州に流される。道行。大臣親子は奥州求女が城に着く。

一段目

▼求女の大將鹿子の庄司をはじめ、東西安達の人々は二人を厚くもてなし、若君は安達三郎と名を改める。

▼信夫の里の佐藤判官頼信は四人の子を持ち、末娘は照日の前という美女であった。安達は照日に見ぬ恋をし、万死の床に臥す。桑原は商人姿となり、姫に安達の文を届ける。姫の返事の素晴らしさに、安達はいよいよ思いに沈むが、それを聞き、清光が縁組を申し出る。姫は田地ヶ岡の二条（安達）の館へ迎えられ、比翼連理の契りを重ねた。

二段目

▼若君玉王丸が誕生して、はや三才に成長した。

▼帝は五条高持を出羽奥州の国司に任じ、高持は高の鶏城に入る。諸大名にもてなされた国司は妻を求め、頼信の弟矢野目太夫が照日の美しさを国司に告げると、国司は頼信と子供兄弟を召し、

所領を与え、姫の婚にしよう求める。頼信は喜ぶが、嫡男権太郎吉信は座を蹴って立つ。

四段目

▼頼信の御台は、国司の仰せに背くならば自害すると吉信を脅して承伏させる。喜んだ頼信はただちに笹屋の四郎光成を使わし、田地ヶ岡から姫を呼び戻す。偽られて連れ戻されたと知った姫は玉王丸にかき口説く。

▼館に戻った安達は、頼信の違例と聞き、信夫の里へ馳せ参じる。頼信は酒宴の席で安達を討とうと企むが、吉信がその企みを安達に知らせる。安達は姫がどうして知らせなかったのかと恨むが、姫は事情を知らない。

▼夫を案じる姫は、思いの程を記した文を玉王丸に託すが、玉王丸は文を落す。文は頼信の手に渡って、姫親子は幽閉される。

五段目

▼頼信勢に襲われた安達は、吉信の助力で危機を脱し、田地ヶ岡に戻る。敵中を切り抜けた桑原も、童子の告げを受けて帰館し、主従喜びの対面を果たす。

▼姫は高の鶏城へ興入れするが、密かに乳母の十五夜を召し、安達の元へ戻る手立てを探る。乳母は、姫が婚儀の喜びに松島への百日参籠を願ひ出ていると謀り、許される。姫は、二人の乳母と小姓源太道広を供に松島へ向かう。

▼安達は討ち死にを覚悟で、高の鶏城へ押し寄せさせる。国司は三方余騎で迎えうち、両軍の戦。桑原の活躍。

六段目

▼安達は主従三騎となる。見次井は安達の自害を諫めて落すと、安達に成り代わり自害する。桑原も最期の戦を挑み自害する。国司は人々の首を晒すが、見次井の首を安達と誤る。

▼安達討死の噂が姫の元に聞えると、姫は自害を望むが、十五夜が諫め、密かに実否を確かめる。十五夜は安達の首が、見次井のそれと気づき、桑原の首と共に盗み出す。

▼頼信は玉王丸が自分を敵と狙うのを恐れ、笹屋に拍子の水池に沈めるよう命じる。乳母の花の舞は、玉王丸の果報の拙さを口説く。花の舞（前）は玉王丸を助けるべく笹屋の同意のもとに討たれる。

七段目

▼玉王丸を殺したと頼信を偽った笹屋が池に戻ると、金色の鷲が玉王丸を連れ去る。

▼松島では、約束の百日も近づき悲しむ姫に、十五夜は塩釜六社大明神を祈るよう教える。十五夜は、再び国司を訪れ、姫が安達の死を喜び更に塩釜への参詣を願っているのを偽り、許される。

▼姫の夢に老翁が現れ、今宵のうちに姿を変えて落ちるよう告げる。姫は小姓源太を頼み、乳母と共に稚児姿に変装して、番所を忍び出る。姫達は小袖に辞世の歌を書き付け、波打ち際に捨てると、追手は自害したと思い、国司に告げる。

▼姫達は鬼面山らを眺めながら、険しい山道を辿り、田地ヶ岡を目指す。途中、山中の「壘石」に一夜を過ごす奇瑞も。

▼田地ヶ岡に着くと安達の姿はなく、姫達は行方を探しに出る。料足に事欠くと、源太は袖乞をして姫を養う。姫の元に老尼が現れ、自らは筑紫豊後国せん角長者の娘だったが、狗竇にとられ、神通

力を得たと述べ、安達が信濃の諏訪兵衛のもとにいること、更に玉王丸も自らが鷲となってさらい、育ててきたことを語り、姫達に戻す。人々は喜び、信濃へ向う。

八段目

▼源太は諏訪の館に入り、安達に再会。諏訪は姫達を館に迎えて、自らは都に上り、帝に国司の横暴や安達の有様を奏聞する。逆怒した帝は安達に兵を与え、国司討伐に向わせる。噂を聞いた国司勢は次々と落ちる。

▼高の鳩城の合戦。源太の活躍。源太は国司を生捕り、安達らは城を焼き、都へ上る。

▼国司の首を討ち、出羽奥州の国司となった安達は、諏訪の館の姫達と共に奥州へ向う。

▼高の鳩城に入った安達は、前国司の荒らした土であるとし、「七尺取て谷に捨、谷の清水結び揚げ、七度清めて家形を立」て入る。安達は頼信を姫に免じて蟄居させ、吉信には勝田柴田を安堵する。▼矢野目太夫を河原で穴に埋め、高札を立てて人々に首を引かせ。見次井や花の前をはじめ、討死の人々を用い、安達は再び富貴の家と栄える。

▼二十年の後、安達夫婦・吉信・二人の乳母・源太ら八人の人々は、塩釜明神の浦八ヶ所大明神に祀られ、ここに塩釜六社は塩釜十四社となる。

▼玉王丸も十五才で元服して安達太郎を名乗り、田地ヶ岡に入城。栄花を誇って大往生の後、安達太郎大明神と顕れた。討死の桑原ら五十四人も、安達太郎に五十四ヶ所大明神と顕れる。